

僧肇における「仏」の理解―至人と法身―

谷川理宣

一

魏晉南北朝の時代は、新しい聖人像の探究がなされた時代といえよう。漢代の儒教的聖人観が、後漢の崩壊と共にその力を失ない、人々は、より自由な主体を求め、新しい価値、人間の本来的あり方を模索する。その問いに答えるものとして、老莊思想が、そして又、外来宗教としての仏教が、中国知識人の間に受容され、もてはやされるようになってくる。そこでは「聖人」とは本来いかなるものであるのか、又その「聖人」になるにはどうしたらよいのかということが追求されたといえる。

僧肇も当時の中国知識人と同様に、新しい聖人像を追求した一人であるといえよう。彼の伝記によれば、「始め玄微を愛好し、毎に老莊をもつて心要とした」が、それに満足できず、「後に旧訳の維摩經を見て、始めて自分の落着くべきところがあつたと歎喜して押し頂いた」とある。これによると、彼は老莊的聖人像に満足できずに、仏教の「仏」特に「法身

仏」の中に理想の聖人像を見出したと考えられる。

ここでは、僧肇における「仏」の理解を通して、中国的老莊的聖人像と仏教的聖人像との相違を考察してみたいと考える。

二

僧肇は「注維摩經」（見阿闍世品注）の中で「仏」についての次の様に解釈している。

「仏者何也。蓋窮理尽性、大覺之稱也。其道虛玄、固以妙絕常境。心不可以智知。形不以像測。同万物之為、而居不為之域。処言數之内、而止無言之鄉。非有而不可為無。非無而不可為有。寂寞虛曠、物莫能測。不知所以名。故強謂之覺。其為至也、亦以極矣。何則夫同於得亦得之。同於失者失亦得之。是以則真者同真。偽者同偽。如來盡照冥詣。一彼実相。実相之相即如來相。故經曰。見実相法、為見仏也。」

僧肇によれば、「仏」とは宇宙の原理を窮め、人間の本性をさぐり尽した（窮理尽性）大覺者のよび名であるという。

それは有無分別の世界を超越した存在でありながら、同時に、この現実の世界において働き続けているものである。

このように「仏」とは、老莊思想という「道——根源的真理——」と同じように、特定の形をもたず、従つて名ももたない。しかし同時に常にあらゆる世界、存在の中に存在しているものである。だから強いてそれを「覚者」というのである。仏・如来というのは、根源的真理（実相）と一体である。従つて根源的真理そのものが、そのまま仏であり如来である。

「仏即道也」というように、「仏」とは「道——根源的真理——」のことであるとも言つてゐる。

本来、「仏」とは諸法のあるがままの相があるがままに知る智慧を開いた人のことである。即ち、諸法の無自性空なること、縁起の理法たる般若の智に目覚めた人の謂である。このありのままの現実の相こそは、諸法の本源的な実体であり、差別を超えた絶対である。これを「真如」「法性」「諸法実相」などという。大乘仏教思想が展開してくると共に、仏陀が覚られた「真如の法」そのものを「仏」とみなす思想が生じて来た。このように「法」「真如」そのものを「仏」と捉えるとき、これを「法身」という。『維摩經』の中に「仏身とは法身である」とある。

三

その「法身」について、僧肇は次のように解釈する。

僧肇における仏の理解——至人と法身——（谷 川）

「肇曰。經云。法身者虛空身也。無生而無不生。無形而無不形。超三界之表、絶有心之境。陰入所不攝、稱讚所不及。寒暑不能為其患、生死無以化其体。故其為物也、微妙無象、不可為有。備應万形、不可為無。弥綸八極、不可為小。細入無間、不可為大。故能出生入死、通洞于無窮之化。變現殊方、応無端之求。此二乘之所不議。補処之所不覩。況凡夫無目、敢措心於其間哉。聊依經誠言、粗標其玄極耳。然則法身在天為天、在人而人。豈可近捨丈六、而遠求法身乎。」（方便品注）

「法身」とは虚空のごときものである。それは現実界、有無分別の世界を超えて存在しているものであつて、菩薩や二乗はもちろん、凡夫のとうてい知り得る境界ではない。その存在は、有無・大小というような相對の世界を超え、しかも十方世界のあらゆる物に存在し働きつづけている。だからこそ、法身は、生死を超えて人々を教化し、様々の人々の求めに應じて救いの手立てを構じてゐる。天にあれば天人となり、人間界では人となつて、常に衆生済度のために働いてゐるのである。だからこそ、真理は我々が目にふれることのできる具体的事物の中にあるのである。どうして遠く、超越的形而上的存在として法身を求める必要があるのか、という。

四

又僧肇は、老莊的究竟者たる「至人」をもつて真理の体现

者たる聖人を表現する。

「至人、冥真体寂、空虛其懷。雖復万法並照、而心未嘗有。」

「夫至人、空洞無象、而万物無非我造。会万物以成己者、其唯聖人乎。何則非理不聖、非聖不理。理而為聖者、聖不異理也。」

「至人、無心則無封。無封則無疆。封疆既無、則其智無涯。其智無涯則所照無際。」

この様に「至人」とは真理と一体となつた無限なる存在であり、従つてあらゆる事象に自在に対応していくことができる。それは「無心」であるゆえであるという。

五

このように見てくると、僧肇が求めた聖人像の特徴が明らかになつてくる。「仏」「法身」「至人」、いずれにおいても、その存在は相対有限の差別の世界を超えた無限なる存在である。しかし又、それは同時に、この現実世界の真只中にあつて働いているものなのである。その心は「無心」（捉われた心がない）であり、その働きは「応物無方」自由自在である。

そのような存在は「一ニ彼実相」「冥_レ想」というように真理と一体となつたものであり、さらには「仏とは道なり」という如く、「道―根源的真理―」そのものである。そのように人格的存在ではなく、真如そのもの、根源的真理こそが「聖人」ということができるのである。

僧肇の「仏」「法身」「至人」等の解釈において目につくこ

とは、その言語表現に老荘的言辞の多いことである。それは同時に僧肇の思考が中国的老荘的であることをまねがれ難い。しかし僧肇が描き出した聖人像・真理そのものは、仏教思想の根本たる般若そのものである。一切の存在は無自性空、縁起的存在である。その無自性空・縁起の道理を悟ることによつて聖人となる。そこに僧肇のいう仏教的聖人観の、老荘的聖人観との違いが存在するといえよう。

六

次にここで、僧肇が大きな思想的影響を受けたと思われる郭象のいう老荘的究竟者「至人」について述べておきたいと思う。郭象はその『莊子注』の中で自己の哲学を展開する。

「神人者、無心而順物者也。」（人間世篇注）

「至人神矣。無心而無不順也。不熱不寒不驚者、神全形具、体与物冥。」（齊物論篇注）

「無心者、与物冥、而未嘗有对于天下也。枢要也、此居其枢要、会其玄極、以応夫無方也。」（齊物論篇注）

郭象は「至人」とは「無心者」である。その体は物と冥する、一体となることによつて、何ものにも捉われない心を持つ。それは同時にすべての対立的相対の世界を超える存在となる。それは「道」と一つになることである。物と冥するから、すべての物に応じつつ、何物にも依存するところはない。即ち「無待者」でもある。

郭象にとつて「物」は自然なる存在であつた。彼は老莊的な、有（万物）を産み出す始源となる本体的実在としての「無」を否定する。

「明生物者、無物而物自生耳。自生耳、非為生也。」（在宥篇注）

郭象によれば、物は全く一つの自然として生起するものである。造物主なく、自ら然るもの、自己の内部に存在根拠をもつ事において物となるのである。物はそれが各各自然であることにおいて一つである。この「一」を自己に見出した時に、すべての対立が解消する。それを郭象は「自得」という。この「自得」の心を得ることが「物と冥する」ということであり、そこに「無心」なる心が生ずるのである。

「是故、統小大者、無小無大者也……齊死生者、無死無生者也。」

……故遊於無小無大者、無窮者也。冥乎不死不生者、無極者也。」

（逍遙遊篇注）

至人とは、その自然なる存在としての物と冥することに於いて、「道」なる「一」と一つになり、「無心者」「無待者」となつたのである。その働きは、

「夫至人、其動也天、其静也地、其行也水流。其止也淵默。淵默之与水流、天行之与地止、其于不為而自爾一也。」（応帝王篇注）

というように、巧まらずしてそうなることにおいて一つである。このような「至人」とは実体概念を超えた「はたらきそのもの」を意味している。「徳は神人の迹なり。神人とは迹す

僧肇における仏の理解―至人と法身―（谷川）

る所以なり。」「迹する所以とは真性なり。」という如く、郭象は「至人」（聖人）を「所_レ以_レ迹」（事物を事物たらしめる根源の真理―はたらきそのもの―）として把えたといえよう。

七

僧肇にとつて「物（諸法）」は縁起なる存在であつた。

「法從因縁生、縁則無自性。無自性則無主。無主則無我人寿命、唯空無相無作無起。」

物はすべて因縁所生であり、それは有でもなく無でもなく、空（虚）なるものである。この道理を体得したものが、「仏」なのである。

郭象は物とは自然なるものとした。自然なることにおいて物は「一」なるものであつた。その物と一体となることにおいて「至人」であつた。そこでは物は実体的存在であつた。

郭象のいう「至人」とは「自然の体得者」であり、「自然」そのものといえるものである。

僧肇は、郭象の「自然」の思想を仏教の「無自性空」の思想によつて、物の実体視を否定する。物我二空の道理を知る智慧が般若智である。その般若智を体得した聖人・究竟者が仏であり、法身仏といわれるのである。物我二空であるから、般若は常に般若として自由自在に働き得るのである。僧肇のいう聖人とはこのように「般若空の体得者」であつた。

（佐賀竜谷短期大学助教授）